

## 野外彫刻清掃を通じた生涯学習の可能性について

田中 梨枝子

### はじめに

本論は兵庫県神戸市において野外彫刻の清掃活動が続けるボランティアグループ彫刻みがき隊「あのね会」(以下「あのね会」)の活動において、清掃活動を通じた彫刻作品の鑑賞や生涯学習のスタイルを報告するとともに、野外彫刻のある都市景観保存の今後の在り方について考察することを目的とする。

研究方法には文献調査とフィールドワークを用いる。文献調査では戦後野外彫刻の定義と、日本各地で実施された、野外彫刻設置事業に関する背景を整理する。また野外彫刻清掃の現在と、神戸市の野外彫刻設置事業について概観する。

続いてフィールドワークでは、あのね会の野外彫刻清掃をはじめとするグループ活動についての参与観察を報告する。著者は「あのね会」と二〇〇七年～二〇一五年、二〇一九年四月～二〇二〇年一月まで共に彫刻清掃を実施してきた。その中で見られたあのね会メンバーの発言や、関心事項を報告する。その上で、彫刻清掃における彫刻作品の鑑賞について、その種類や鑑賞の段階についてまとめる。さらに、彫刻作品の鑑賞から都市の文化的景観保存を考える。美術作品鑑賞との接続についてその可能性を提示する。

### 一、野外彫刻を考える

#### (一) 彫刻、野外彫刻への問題意識と先行研究

近年「彫刻」を学ぶ学生が著しく少なくなった。本学では、「彫刻」コースは「総合造形」へ改名された。重労働で危険物を取り扱う、制作にも発表にも広大なスペースを必要とし、大型作品など発表の場も少ない、就職も難しい。現代の学生にとって「彫刻」に関心をもつことは難しいかもしれない。しかし、街中では数多くの野外彫刻を目にする。そして道ゆく人々は、これらの彫刻作品に特段感想や疑問を抱くことなく、街中にある野外彫刻の前を通り過ぎる。著者はこの現象が以前から不思議であった。現代社会における野外彫刻の意義と

は何か、そのような疑問を漠然と抱いていた頃に出会ったのが今回報告するあのね会の活動である。あのね会の活動を知りメンバーと交流を重ねることで、彫刻の鑑賞やその意義について、地域貢献や学習の観点から多くの気づきを得た。それはつまり、文化財や美術品としての価値に加えて、地域への愛着を育くみ、生涯学習の動機付けとして野外彫刻の活用の可能性を見ることができたのである。本論で述べる生涯学習については、堀薫夫の生涯発達論から自己実現として発達の考え方に基づく<sup>(1)</sup>。現在、街景色に溶け込んでいる野外彫刻であるが、確実にその記憶は風化の道を歩んでいる。これからの野外彫刻について考えるには、立場の異なる人々の意見を広く見渡す必要があるのではないか。それは即ち現代における野外彫刻の意義について示唆を与えると考えたのである。本項では「野外彫刻」を「歴史」「美術教育」「まちづくり」「生涯学習」の観点から概観する。その上で野外彫刻の清掃活動についてどのような意義があるのかを問いたい。

本論では野外彫刻を、屋外に設置されており外光のもとに鑑賞されるものと定義する。後藤末吉によると野外彫刻は、礼拝・記念・呪術・象徴・遊具・屋外装飾・純粹野外彫刻に分類され、一つの作品に複数の分類要素がある場合も想定されている<sup>(2)</sup>。特に本論で取り上げる彫刻は、環境の美化や景観の一要素として設置された純粹野外彫刻を中心とする。それはまた土方定一(一九〇一～一九八〇)が普及した、野外彫刻展を彫刻のあるまちづくりにより設置された彫刻群を示す。この都市計画の中の彫刻設置事業に関する研究には、その歴史的経緯や、設置エリアの分布傾向、野外彫刻の鑑賞などがある。あるいは野外彫刻の素材研究や保存・修復に関する研究も見受けられる。近年の研究の多くは、日本各地の街中に彫刻の風化を危惧するという動機が主であるといえる。そしてその根底には、現代に生きる我々がどう価値付け、未来に引き継ぐのかへの問いがあるように思われる。本研究は、こうした諸問題を含む野外彫刻について、生涯学習の観点からその役割について探りたい。野外彫刻の清掃活動が続けるボランティアグループの参与観察を通じて、野外彫刻という芸術文化を市民がどのように受け止めているのかを報告するものである。野外彫刻は誰のものかを考え、未来へ向けて検討を重ねるための材料のひとつとなれば幸いである。

## (二) 戦後の野外彫刻設置事業から清掃活動まで

本項では野外彫刻に関連する戦後の都市計画について先行研究を概観し彫刻清掃活動との関連をまとめる。

一九四五年、終戦を迎えた日本では、戦時中の金属使用制限と供出により、かつて彫刻があったものの空白になった台座だけが残されているような状況であった。さらに、GHQにより、軍国色の強い記念碑や銅像の一掃が始まる<sup>(3)</sup>。そして空白であった台座には「平和」「愛」をテーマとした新たな彫刻設置が始まる。一方焼け野原となった地方都市では、街の復興に芸術・文化を取り込もうという動向とともに野外彫刻を選定の間とした野外彫刻設置事業が展開されるようになる。

全国で最初に大規模野外彫刻展を実施した山口県宇部市は、一九六一年より彫刻設置事業を開始、美術作品としての彫刻を計画的に都市空間に設置する、「彫刻のある街づくり事業」第一号となる。宇部市について野外彫刻展を開始したのは神戸市である。一九六八年に第一回目となる大規模野外彫刻展を開催している<sup>(4)</sup>。宇部市と神戸市の設置事業は共通点が多く、これについては神奈川県立近代美術館長土方定一、彫刻家・柳原義達(一九一〇―二〇〇四)、彫刻家・向井良吉(一九一八―二〇一〇)らの関与があり、神奈川県立近代美術館「集団野外彫刻展」など、土方が普及に努めた野外彫刻推進構想に含まれたのではないかという指摘もある<sup>(5)</sup>。

さて、都市空間へ彫刻が進出したことを受け、各地で野外彫刻のコンペディションが開催され、若手作家達の登竜門となった。これにより一九七〇年代以降彫刻界では景気の上昇とともに彫刻家たちが活発な動きを見せた。一九八〇年代に入っても日本各地で実施されている<sup>(6)</sup>。彫刻のあるまちづくりが最盛期を迎える裏で、長期的な維持管理、メンテナンスも含めた計画は特に語られていない。その結果、経年劣化や汚れ錆など、街の景観の美化のために設置された野外彫刻は、清掃不足や錆・汚れの問題が各地で指摘されるようになる。

野外彫刻の清掃活動は、山口県宇部市、北海道札幌市、旭川市、愛知県春日部市、大分県大分市など、多くの自治体で実施されている。いずれも彫刻のあるまちづくりを推進し、多くの野外彫刻が街中に設置されている都市である。日本で最初に野外彫刻展を開催し、現在も宇部ビエンナーレとして現代彫刻展を開催する宇部市は、春分の日と秋分の日の日年二回清掃を実施、毎回二〇〇名を

超える参加者があるという<sup>(7)</sup>。札幌市も札幌彫刻美術館友の会による細やかな野外彫刻の清掃が続けられている。一二〇名を超える会員があり<sup>(8)</sup>、彫刻清掃のみならず、学習会や会報の発行など組織だった活動が展開されている。宇部市は観光コンペディション協会が窓口となり、旭川市や春日部市、大分市も行政機関が窓口になりボランティア募集をかけている。

本稿で取り上げる神戸市の事例は、宇部市や札幌市に比べると規模は小さく、行政の協力はあるものの、主体は神戸婦人大学<sup>(9)</sup>の卒業生有志が立ち上げた市民グループである。あのね会が本格的に活動を開始したのは二〇〇七年のことである。この頃、神戸市内の野外彫刻は、設置されて以降、メンテナンスが十分に行き届いておらず、老朽化や安全面の問題から移設されたりしていた。この経緯については次章以降で述べる。

## 二、神戸市における野外彫刻設置事業

### (一) 野外彫刻によるまちづくり構想

神戸市では戦後都市計画を進める中で単なる整備ではなく、そこに都市美という概念をプラスしようと計画していた。そこで、ヨーロッパの都市で古くから実践されていた公共彫刻に着目し、神戸における実践の場として、一九六八年に神戸須磨離宮公園現代彫刻展、一九八一年に神戸具象彫刻大賞展(第一回展は「神戸新進彫刻家の道大賞展」)の開催に至った。神戸市では、都市美の要素として、花・緑・彫刻を三つの柱と考え、街づくりの中に積極的に取り入れた。そして、彫刻に関しては、現代彫刻展のテーマを通じて都市空間と彫刻との関わりを探り、彫刻展の入賞作品等を公共空間に設置し、彫刻の街を一つの景観として捉える事業を展開した。また彫刻展の開催を通じて多くの彫刻家に広く発表の機会を提供するとともに、市民に一流の作家の作品を鑑賞する機会を提供しようとした。

このようにして、野外彫刻の設置事業は進められ。神戸須磨離宮公園現代彫刻展はビエンナーレ形式で開催、会場は神戸市立須磨離宮公園、作品展示は公募入選作品、大賞となるのは神戸市長賞で賞金五〇〇万円、その他土方定一記念賞、朝日新聞社賞、須磨離宮公園賞などがあつた。一方神戸具象彫刻大賞展も神戸須磨離宮現代彫刻展と同じくビエンナーレ形式で開催、会場は新しく開かれた街や大規模公園、第四回展は「神戸ポートアイランド南公園」、第五回展

は「しあわせの村」第六回展は「六甲アイランド」、第七回展は「神戸ハーバーランド」、第八回展は「西神南ニュータウン」であった。展示作品は招待作品と公募入選作品で構成され、大賞は同じく神戸市長賞で賞金五〇〇万円、準大賞、特別優秀賞、読売賞などがあった。さらに神戸市は彫刻を見どころとした二つの街路を整備した。ひとつは、一九七三年「みどりと彫刻の道」である。これは文化環境づくりの一環としてこうべ文化ホールから神戸駅に至る道路（湊川神社西側）を整備したもので、以後、順次彫刻が設置された。もう一つは一九八一年に整備された「花と彫刻の道」である。新神戸駅からフラワーロードを花と彫刻で飾り、神戸のメインロードにふさわしい文化的都市環境づくりを目指したものであった。

## （二）野外彫刻展の中止とその後のメンテナンスをめぐる問題

一九九五年の阪神淡路大震災により神戸市の多くの文化財・文化施設が罹災し、野外彫刻も例外ではなかった。それまでに設置された三八五体中四八体の作品が被災した。被災した作品についてはその後、一九九八年までに修復済であるというが、震災以降、神戸市における野外彫刻設置事業は停滞することになる。

一九九六年、神戸県象彫刻大賞展は同年の第八回展開催を最後に休止し、神戸須磨離宮公園現代彫刻展は一九九八年の第一五回展開催を最後に休止した。一九九八年一月には「彫刻整備に関する懇話会」により、この二つの野外彫刻展の休止が正式に決定された。彫刻展の見直しに至った経緯や理由は次のようなものである。四〇〇体を超える作品設置の実現、彫刻のまちとして全国的にも高い評価を得て、都市美の創造に効果をあげたこと、また、全国で同様の彫刻展が開催されるようになったこと、作品の抽象化と設置困難な作品応募が増え街角に設置困難なものが多いこと、さらに市内に設置できるような場所の確保が困難になったことが挙げられた。以上のことから、彫刻のまちづくりに一定の成果を果たしたとして両展の休止を決めた。ただし彫刻の整備は継続することも同時に決定して現在に至る。

彫刻のメンテナンス、特に素材の劣化に伴う適切な処置については、専門的な知識が必要となる。神戸市内の彫刻の維持管理、清掃活動は宇部市や札幌市のような協力団体によるメンテナンスは見受けられない。神戸市の場合は前述

のように行政主体で維持・管理が実施されてきた。無論メンテナンスに際してはしるべき業者や専門家への相談がなされてきたと考えられるが、これについての情報は公開されていない。街角では時折、過剰なまでに錆止めの塗装をされた野外彫刻を目にすることもある。また突如街角から姿を消す野外彫刻もある。これらはメンテナンスのために一時的に移動させた場合もあるが、安全上の問題により完全に撤去されたもの、あるいは彫刻が設置された施設の取り壊しや移転により別の場所に移設されたものがこれにあたる。大規模野外彫刻展が終了したのちも、このように野外彫刻の設置や移設、メンテナンスは細々と進められ、一〇年近く経過したのちに、あのね会は結成されることになる。

## 三、「あのね会」による野外彫刻清掃活動とその中での学び

### （一）あのね会の発足

神戸市を活動拠点とする「あのね会」は二〇〇七年に結成された彫刻清掃のボランティアグループである。初代メンバーとは当時神戸婦人大学文化スポーツコースの在学生である。結成の経緯は次の通りである。二〇〇六年同大学において彫刻家であり神戸女子大学教授であった新谷琇紀（一九三七―二〇〇六）の講演を受講し、彫刻に関心を持った有志が集まり、「荒岡グループ」を結成する。卒業研究のテーマを「神戸の彫刻」に決めた荒岡グループは、新谷から神戸の野外彫刻の状況聞き、神戸の彫刻のためにできる活動として、野外彫刻の清掃活動を実践した。そして二〇〇七年三月に神戸婦人大学を卒業後「あのね会」を立ち上げる。同会の名称は「みどりと彫刻の道」に位置する、同大学正面玄関前に設置された二体の愛らしい少女像、廣嶋照道《あのね》に由来する（写真1）。

こうして「あのね会」は市民の財産である彫刻を守り、神戸を訪れる人々に彫刻を愛で喜んでもらうことを目指し、本格的に活動を開始した。あのね会の活動の概要は次のようなものである。まず年間計画を立てスケジュールに沿って市内各所の野外彫刻を清掃する。活動頻度は月に一度、午前中の数時間で彫刻清掃と周囲の美化活動を行う。年度末の三月には総会を実施、年間の活動を報告書にまとめ神戸市の野外彫刻所管部署へ提出している。あのね会の活動の中心は、神戸市内で野外彫刻が密集しているエリアである。前述した、神戸市が野外彫刻のために整備した「花と彫刻の道」「みどりと彫刻の道」、そして現代具象彫刻展の会場などである。それは前述したように当時新しく開かれると



同時に彫刻設置が進められたエリアなのである。

## (二) 彫刻清掃活動の記録

現在あのね会の行う清掃手順は、次のとおりである。

- ① 水をかけ、ブラシ等で汚れをおとす
- ② 雑巾で水気をとる
- ③ 乾拭きをする
- ④ 絹布で磨く
- ⑤ 彫刻周辺の美化活動

以上の手順は素材がブロンズのものである。石やステンレス、その他素材の場合は④を省略するか、①を調整して対応している。(写真2)二〇一五年度にはワックスがけを試験的に行ったこともあるが、配合や材料の調達に不安があるとして現在行っていない。清掃においては、水場の確保や清掃時に出るゴミの処理について事前調整も必須である。また、毎年決まった場所を訪れて清掃するため、昨年度の状態と一年後の状態を比較し確認する。その際に異常が認められたり、周辺の雑草や植栽の処理など、あのね会だけでは処理しきれない事由がある場合は、野外彫刻の管理をする神戸市の担当部局および所管施設へ報告を行っている。(写真3)

あのね会は市民グループの活動であるが、発足当初から神戸市の担当窓口と



写真1 廣嶋照道《あのね》を清掃  
(2019年6月26日著者撮影)



写真2 小田襄《風景船》清掃風景  
(2019年10月23日著者撮影)

積極的に連絡を取りあい活動を実施してきた<sup>(10)</sup>。清掃する彫刻がある事業所への活動日の事前連絡、必要な水場の確保、植物の剪定や雑草引きをしたゴミ処理の相談、発見した彫刻の異常についての報告など、細やかな連絡と情報共有を続け、現在の二人三脚の関係性を築いたといえる。彫刻清掃は単なる街の美化活動ではない。清掃する対象が美術作品であり、芸術的価値あるものを触るという責任感をメンバーが持っているからこそ、自治体との連携体制を整えて清掃している。この活動への使命感は他都市の清掃ボランティアグループと比較しても共通している。また、市民が自分の手で文化財を守ろうとする活動に共感する人々がいることも重要である。清掃活動中、通り過ぎる人々から応援や感謝の声をかけられることもしばしばあり、これがメンバーの励みとなっている。(写真4)

著者もあのね会の活動に共感したその一人である。当時神戸ゆかりの美術館<sup>(11)</sup>の学芸員として美術館で教育普及に関わる企画・実践を行っていた著者は、あのね会の活動を知り、美術館の教育活動を共同開催しようと思った。著者が勤務する美術館において絵画展については一定の愛好者はいるが、彫刻展となると興味を示す来館者が極端に少ないことが気になっていた。しかし、美術館がある六甲アイランドは第六回神戸具象彫刻大賞展の会場であり、街角には四〇体を超える野外彫刻が設置されている、野外彫刻の密集エリアであった。彫



写真3 新谷琇紀《ALBA-G II》周辺の雑草を刈る  
(2019年11月27日著者撮影)



写真4 活動時の声かけ (2019年9月25日著者撮影)

表 1 あのね会略歴

年	清掃 回数	清掃 作品 数	特記事項
2006年	6	19	神戸婦人大学在校生、荒岡グループとして活動 新谷琇紀逝去（8月）
2007年	6	31	あのね会発足（4月）
2008年	8	43	
2009年	11	51	
2010年	15	71	神戸ゆかりの美術館共催（4月）
2011年	15	99	神戸ゆかりの美術館共催（4月雨天中止、5月清掃のみ実施）
2012年	14	83	神戸ゆかりの美術館共催（4月）
2013年	14	83	神戸ゆかりの美術館共催（4月）
2014年	13	81	神戸ゆかりの美術館共催（4月、2015年3月）
2015年	14	89	
2016年	13	94	神戸市社会福祉協議会より感謝状授与（9月）
2017年	13	98	新谷英子逝去（1月） 関西テレビ「ちんぷんぷい」取材（5月29日放送） 神戸市文化活動功労賞受賞（9月） 毎日新聞取材（2018年3月1日掲載）
2018年	12	102	新谷澤子逝去（7月） 神戸市内彫刻設置状況報告書改訂版提出（10月）
2019年	12	105	神戸市彫刻設置状況報告書改訂版提出（6月） 神戸市内野外彫刻と屋内彫刻設置場所報告書を提出（12月）

三つ目にあのね会代表のマネジメント力の高さである。あのね会の平均年齢は現在七十一歳を超える。メンバーの多くが毎月一回の清掃活動を楽しみにしていることは、節々に現れている。清掃活動は地域貢献であると同時に身体を動かす健康法のひとつであるとの意見も聞かれた。なによりも清掃を終えた後にメンバー同

刻のまち神戸を体験できるよう、美術館のみならず周辺の街並みも合わせて情報発信をすることで、彫刻に興味を持ち、神戸の芸術文化の特色を伝えられるのではないかと、という思いで、あのね会代表に連絡したのである。

あのね会と共にイベント実施に至ったのは二〇一〇年である。六甲アイランドにおける彫刻清掃活動イベントとして、「彫刻磨き隊と行く、野外彫刻クリーン作戦」を同年から二〇一五まで共同開催し、神戸ゆかりの美術館周辺の野外彫刻を一般参加者と美術館スタッフ、あのね会メンバーと共に清掃した<sup>(12)</sup>。参加者は地元住民を始め、インターナショナルスクールの生徒や教員、同じく神戸市内で野外彫刻清掃のボランティア活動を行う市民グループ、まちづくNP O団体など、いずれもあのね会の活動に賛同した面々が清掃に加わった。

その後も地道な清掃活動を積み重ねていったあのね会は、二〇一七年にそれまでの活動が認められ、神戸市文化活動功労賞を受賞、現在も毎月一度の清掃活動を続けている。

(三) 活動のモチベーションを支えてきたもの

あのね会の活動を支えてきたものは何か。著者は次の三点だと推察する。一つは仲間同士のつながりと地域への貢献活動。次に彫刻家・新谷琇紀を始めとする神戸ゆかりの彫刻家一

家である新谷家との関係。

三つ目にあのね会代表のマネジメント力の高さである。

あのね会の平均年齢は現在七十一歳を超える。メンバーの多くが毎月一回の清掃活動を楽しみにしていることは、節々に現れている。

清掃活動は地域貢献であると同時に身体を動かす健康法のひとつであるとの意見も聞かれた。なによりも清掃を終えた後にメンバー同

表 2 2019 年あのね会活動実施記録

月 日	場所	作品	個数	参加人数
4月24日	六甲アイランド（神戸市東灘区）			雨天延期
5月8日	六甲アイランド（神戸市東灘区）	7	7	9
5月22日	王子動物園（神戸市灘区）	3	3	6
5月22日	六甲ライナー住吉駅（神戸市東灘区）	2	2	4
6月26日	みどりとの彫刻の道（神戸市中央区）＊	16	17	14
7月24日	しあわせの村（神戸市北区）＊	7	7	12
9月25日	大倉山公園（神戸市中央区）＊	8	8	12
10月23日	地下鉄名谷駅前・須磨パティオ（神戸市須磨区）	3	3	3
	総合運動公園前（神戸市須磨区）＊	6	6	9
11月27日	県民オアシス・県公館（神戸市中央区）＊	10	10	14
12月18日	彫刻設置場所調査 ポートアイランド（神戸市中央区）	-	-	2
1月7日	彫刻設置場所調査 こうべまちづくり会館	-	-	1
1月22日	JR元町駅・ポートセンター・国道2号海岸線プロムナード（神戸市中央区）＊	11	11	13
1月22日	講義・勉強会 神戸市役所1号館19階会議室＊	-	-	14
2月26日	花と彫刻の道 三宮駅北側、フラワーロード北側（神戸市中央区）＊	13	13	9
3月25日	花と彫刻の道 フラワーロード西側、東道園地（神戸市中央区）	19	32	14

表 3 神戸ゆかりの美術館共同開催のイベント実施記録

活動日	イベント名	場所	参加人数
2010年 4月24日	彫刻みがき隊と行く 野外彫刻クリーン作戦！	六甲アイランド内 （神戸市東灘区）	14
2011年 4月22日	彫刻みがき隊と行く 野外彫刻クリーン作戦！	六甲アイランド内 （神戸市東灘区）	雨天中止、後日メンバーと美術館スタッフで清掃
2012年 4月1日	彫刻みがき隊と行く 野外彫刻クリーン作戦！	六甲アイランド内 （神戸市東灘区）	14
2013年 4月20日	彫刻みがき隊と行く 野外彫刻クリーン作戦！	六甲アイランド内 （神戸市東灘区）	19
2014年 4月19日	彫刻みがき隊と行く 野外彫刻クリーン作戦！	六甲アイランド内 （神戸市東灘区）	21
2015年 3月21日	彫刻みがき隊と行く おでかけ 野外彫刻クリーン作戦！	フラワーロード （神戸市中央区）	16

士で語り合う和やかな昼食を、活動の一環としていることが、活動継続のひとつの要因であろう。

次に新谷家とのつながりである。彫刻家・新谷英夫（一九〇四―一九九五）を父にもつ新谷琇紀、澤子（一九三九―二〇一八）、英子（一九四二―二〇一七）兄妹三名は全員彫刻家であり<sup>(13)</sup>、あのね会の良き理解者であった。特に会の発足に関わった琇紀からは清掃する野外彫刻についての基礎知識や、初心者でも可能な材料別の清掃方法を習ったという。その後は琇紀の末妹、英子が清掃のアドバイザーを引き継ぎ、さらに英子の逝去後は、姉の澤子へと引き継がれた。二〇一八年以降も、折に触れ新谷家の関係者へ報告を続けている。新谷家とのつながりは、彫刻についての相談役として、あるいはあのね会の活動を続けるにあたっての精神的支えであったことは想像に難くない。また、新谷琇紀の作品を所蔵する神戸ゆかりの美術館との出会い、美術館における教育普及事業の中で彫刻清掃活動のイベントの共同開催に至ったことも、あのね会の活動継続へのモチベーション向上に少なからず影響したことも惜越ながら申し添えておく。

最後に会の運営については、会代表のマネジメントに頼るところが大きい<sup>(14)</sup>。メンバーとの信頼関係も厚く、統率の取れたチームマネジメント力があつての活動継続であると考ええる。毎回の清掃活動計画と資料の作成、メンバーへの連絡や活動指示、神戸市担当職員との連絡調整、活動報告書の作成、総会の運営



など一人何役も担っている。さらには野外彫刻の設置状況をメンバーの協力を得て、自らの足で記録してまわり、市内全域での野外彫刻の状況について報告書を発行している。代表の手厚く細やかなマネジメント力と行動力については、あのね会メンバー間でも周知の事実であり、会の活動継続に大きな影響を与えている。また清掃を続ける中で、神戸市内に現存する彫刻の状況を確認するべく、市内全域をまわり、野外彫刻の設置状況を報告書にまとめ提出している。会の運用のみならず、神戸の野外彫刻への問題意識をもつて調査を続けている。さらに市内は元より山口県宇部市など、同じく彫刻の清掃を行う他府県のグループの動向についても関心を持ち、宇部市のボランティアグループとの情報交換についても窓口を務めている。

### 三、彫刻清掃と鑑賞、学びの可能性

#### (一) あのね会メンバーの参加動機と学習のレイネス

彫刻清掃という活動を共にしているメンバーの参加動機や関心は多様である。例えば、野外彫刻に興味がある、芸術分野に関心がある、仲間と共に活動をしたい、体を動かしながら地域貢献をしたい、何社会の役に立つ活動をしたい、などが挙げられる。押し並べて共通する点は、芸術文化に関わる野外清掃活動を通じて社会とのつながりを維持したいという動機であろう。それは仲間内でのつながりであり、婦人大学や神戸市役所などの地域社会の組織とのつながりであり、彫刻清掃を通じた地域の人々とのつながりなど、清掃活動を通じて得られる関係性全てを示していると言える。あのね会が活動の継続に成功している点は、緩やかで心地よいつながりを持った運営が維持されていることにある。前述した代表のマネジメント然り、メンバー同士が自立した個人としてあのね会に関わっているところも、風通しの良いグループ運用につながっていると言える。そして全員の参加動機が異なるという点も重要である。例えば全員が彫刻の清掃や保存に対して強い使命と責任感をもって参加していたとする。この場合、意見の対立や相違が原因で険悪な空気が流れる可能性がある。また全員が、ランチの準備運動に清掃に来たとする、その場合でもやはり、数回で飽きて活動の目的が別のものとなり、彫刻への関心は薄れてゆくかもしれない。それぞれが微妙に異なる動機をもって集まるからこそ、メンバーへの興味関心も湧き、お互いを尊重する発言も生まれる。これを自然にメンバー同士が行なっているの

がああの特徴であろう。

次に、社会とのつながりの自覚についてである。あのね会のメンバーは婦人大学の卒業生であり、卒業後も地域社会に貢献する、その一環として清掃活動を選んでいる。つまり、何らかの社会的存在として、役割を担っているという自覚をもって活動をしていることになる。これも責任感という自身を前に進める原動力としてプラスに働いている。

最後に新谷一家など自分達の活動を見守る存在があるという事実も活動の継続を助長したと言える。このような背景をもったあのね会各メンバーは決して学習を目的とした集まりではない。しかし、社会とのつながり、仲間とのつながりの中で自然と学びを実践している。新たな知識・技術の獲得や、自らの変容を受け止めるという学習へのレイネスを仲間内で作り上げているのだ。

#### (二) 野外彫刻の鑑賞―あのね会メンバーの発言から―

著者が活動をとにもする中で、個々のメンバーから活動の合間に様々な質問や感想を聞き取っている。本項ではこの発言をもとに、メンバーがどのような鑑賞を行っているのか整理して述べる。

##### ① 清掃について

「汚れている彫刻を見るとかわいそう」

「道具もね、家にあるものでいろいろ手作りして楽しいのよ」

「みんなに綺麗な姿を見てもらわなくちゃね」

「彫刻の周りの木もきれいに剪定してあげたいわね」

「草が茂ってかわいそう、街も汚れて見えるようで嫌ね」

「ほらお掃除する前より輝いてるでしょ」

「[彫刻に] 手袋をはめたり花を置いたり、愛情なのか悪戯なのかわからないから困るわね」

「題名がよくみえるようにお掃除してあげなくちゃ」

「この素材、このみがき方で大丈夫かしら」

「素材によって磨き方を変えているのよ」

「この石は何か特別な掃除をした方がいいかしら」

「これはブロンズの錆色なのか元々の色なのか、このまま磨いて大丈夫かしら」

## ii 彫刻について

「この作家さんは別の場所にも作品があったわよね、ちょっと形が違うけれど」  
「前と台座が変わったように思うけれど」  
「この彫刻はこっちの向きから見るのが正解？」  
「像は普通の人よりちょっと大きめに作ってるわね」  
「でもヌードの女の人の像ばかりってどうしてなのかしら」  
「男の人の裸もね、掃除だと気にならないけど、これって芸術なの」  
「手で触ると見ているだけでは、気づかなかったことに気づくのよ」  
「これはブロンズなのかしら、他の作品とは少し質感が違うように思うけれど」  
「この素材は何でできているのかしら、あまり見たことのない錆色で」

## iii 交流について

「通りすがりの人にありがとう、って言われると本当に嬉しい」  
「若い人にももっと知って欲しいな」  
「足腰が元気だからできるのよ、良い運動」  
「みんなでランチ、その前の運動にちょうどいいわ」

これらは活動の合間に聞かれた、仲間内の会話であり眩きとも取れるやりとりである。著者が活動の際に聞き取った内容を清掃、彫刻、交流の三つに分類したものである。この眩きの特徴は、純粹な興味や関心、率直な感情を発したものであるということだ。インタビューやアンケートではなく率直なその場で聞かれたコメントを拾い集めたものである。実はこのような活動の中での眩きの中にこそ学びの要素があると考えている。

コメントは一見、美術作品の感想とは程遠いように見える。しかし、対象をしっかり見ていることはiやiiの内容からも読み取ることができる。また個人がああね会に自分の居場所と認めているからであろう、率直な意見が多い。また自身の経験と知識の間に浮かぶ疑問を口に出していることも特徴的である。答えを出すのではなく、問いを立てること、これは自らの経験の上に立って、行動そのものを変えていく学びの原動力である。美術作品を鑑賞する上でも、受動的に作品の知識を得るものではなく、能動的な鑑賞であるといえる。このような鑑賞こそ、実は対象に実直に向き合い、感性を働かせ楽しめるのではない

だろうか。無論美術館内でも彫刻は「触覚の芸術」であるとして、触る鑑賞の試みは実施されている。それは彫刻の量感や質感を確かめるためには有効である。しかし、野外彫刻の清掃は触ることを通じて様々な情報を探っている。状態チェックから始まり、以前の状態との比較などコンディションチェックを行う。彫刻そのものを確認していく作業を何度も繰り返すという点で、鑑賞よりも念入りに対象を見ているのである。自らが触り、確認し、比較し、清掃することによる対象の変化を実感した上で、改めて作品への感想や疑問が生じる。これを繰り返し行うことで、さらなる発見があること、このサイクルが彫刻清掃における鑑賞をもっとも特徴づけている。

著者は、春から秋にかけての数ヶ月間、メンバーの眩きを集め、その関心や率直な意見を受け止めながら、ささやかな情報提供を思い立った。野外彫刻の歴史的背景や神戸の芸術文化についての勉強会を二〇二〇年一月に試みた。この結果については、まだ経過観察の途中であり、また稿を改めて報告したい。

## (三) 今後の課題 継続に必要なものとは

このように活動が続けてきたあかね会には、様々な問題点や未来への不安を抱えている。代表やメンバーからでた問題意識について項目で挙げていくと次のような事柄である。

- i 所属メンバーの高齢化
- ii 新規加入メンバーの不足
- iii 活動の情報発信の不足
- iv あかね会の運用の分業化や役割分担
- v 活動のスキルアップ・学習・交流の機会の充実
- vi 継続へのモチベーション維持

大別すると会の運用に関する問題と、活動の広がりに関する問題の二つに分けられる。こうした問題意識に至るのは、会の運用と清掃活動全てを自分ごととして捉えるからこそであろう。そして会の運用が完全民間、個人が行うものであるからこそその問題であると言える。あかね会の場合、会の中だけでなく関係各所との良好な関係継続も努力を必要とする。現在、神戸市の担当部局とは

良好な関係を築いているが、三年程度で異動を繰り返す行政担当と情報の引き継ぎがうまくなされるかどうか、常に不安を伴う。美術館との連携は学芸員交代により、博物館教育や彫刻の専門担当がいらないという理由で、イベントが継続不可になるという経験も過去にあった。しかし、これらは会の活動を阻む障壁ではない。あくまで留意事項であり、それでもあのね会は柔軟に対応策を練り前に進もうとする。

ここで注目したいのは、vとviの項目である。これはメンバーを思う代表の心遣いでもあり、自らのスキルアップと、会の活動の広がりへの希望と受け取ることができる。具体的に、彫刻に用いられる素材についてもっと勉強する、安全面での点検や素材の劣化か錆かを見分けられるようになる、ブロンズ以外の素材の磨き方も勉強し、適正な処置と道具を知る、彫刻の歴史や神戸の美術家についての知識を得るなど、より彫刻を知るために取り組みたい事柄は多くあるという。十二年の活動歴の中でこれらが実践できなかった事情に目を向けると、あのね会の活動の特質が見えてくる。様々な勉強の実戦に至らなかった大きな理由は、この数年市内の彫刻設置状況の把握に尽力してきたことである。野外彫刻設置状況の把握は三年以上を費やし、神戸市側で把握していた数を大きく上回る七二二体の作品を現地で確認している。加えて市内の彫刻分布図を作成し、野外彫刻の実態把握に大きな成果をあげている。このデータを基に今後どのように分類・管理していくのかは今後の課題でもある。このように大きな労力をまずは市内の野外彫刻の実態把握にかけた。その一方で、美術館や新谷一家という学びの機会を失うという喪失もあった。

しかしながら、現在所属する一六名のメンバーと、自分たちで決めた計画を遂行していくことはあのね会の原動力であることは間違いない。メンバーは街の景観に溶け込む彫刻への奉仕活動を楽しみながら活動が続いている(写真5、6)したがって無理をしてまで多くの情報を詰め組む学びはあのね会には適さない。何よりも知識を得て、清掃に生かしたいというモチベーションと体力の維持が大切なのではないだろうか。これまで活動を共にしていると、一つずつ課題を解決していくことが、あのね会のあゆみには適しているように思われる。お互いを労わりあい活動を進める中で、今後彫刻清掃でつながる出会いが生まれることもあるだろう。その時にはまた、あらたな課題の発見と、活動のモチベーションが高まることを期待している。これこそがあのね会ならではの学びのス



写真5 街の景観と野外彫刻  
(2020年1月22日著者撮影)



写真6 街の景観と野外彫刻  
(2020年1月22日著者撮影)

タイトルと言えよう。

このように彫刻の清掃という活動を、自分ごとに捉え、楽しみながら継続していることにこそ、あのね会の生涯学習と社会貢献活動の意義があると考えられる。あのね会の発足には、彫刻家との出会いが大きく影響し行動を起こすに至った。さらに美術館との連携をバネに活動を推進した。芸術家や文化施設が、このような市民活動の志を尊重し、地域社会で活躍するための、繋ぎ手となることも地域の芸術文化を支えていくことの助となるだろう。また、市民活動と行政が目標と使命感を共有し、協働しつつ良好な関係性を持つことで、芸術文化を守り育てる活動へと接続する可能性も見えてくるのである。

#### おわりに

野外彫刻の清掃活動は、その設置事業以降により活発に展開された、市民によるまちの景観の美化と保存活動である。そして、それは同時に、街の景観と共に彫刻作品を鑑賞するという芸術に触れ合う機会でもある。あのね会にみる彫刻清掃は、主体的な美術作品鑑賞と、活動全体を通じて人間関係の構築や社会とのつながりの中で学び続けるという生涯学習の場として展開されている。このような活動は行政主体のボランティアとは異なる特徴を持つ。つまり、誰かに設定された活動内容や目標に向かうのではなく、自分達で決め、向かうべき方向へ自ら舵を切るという自主性に他ならない。その結果、地域社会の中で、芸術文化への貢献をするための独自の活動の場を創出したのである。あのね会の推進力はまた、市民の力強さと共に、生活の中に様々な学習の場があることを



改めて気づかせてくれる。そして一方で、複数の協力者の刺激を糧に、活動を継続し充実させてきた経緯から得るものもある。市民の自主的な試みが継続されるには、やはりモチベーションを保つための何らかの刺激が必要であることが明らかとなった。このように、あのね会の運用と活動の履歴は、主体的な学習環境を考えるための多くの示唆を与えるものである。

最後に、著者は学芸員として神戸ゆかりの美術作品を鑑賞する際、来館者へ繰り返し伝えて来たことがある。

「美術作品は作者が制作を終えた後は鑑賞者に委ねられる。作品について様々な角度から鑑賞し、その価値を発見し伝えあうことは、我々が未来へ地元の芸術文化を引き継いでいく営みであり、我々の責任でもある。」

あのね会が現在も活動を継続していることは、この営みに他ならない。それはまた、彫刻のあるまちづくりのその後について、空白の時間経過を無言で訴えているとは取れないだろうか。メンバーの声を借りるなら「かわいそうな彫刻」の未来はどうなるのかという問いである。街中の彫刻とどのように向き合うのか、その議論がなされることを願って止まない。

本調査にあたり、彫刻みがき隊あのね会の皆様の多大なご協力を賜りました。特に代表荒岡美知子様には、過去から丁寧に積み上げられた活動記録とデータをご提供いただきました。心より感謝申し上げます。またあのね会の勉強会のために会場をご提供いただき、且つ会の活動へ多大な理解を賜りました、神戸市文化スポーツ局文化交流課の柴田美里様にも、心よりお礼を申し上げます。尚、本文中の人名はすべて敬称を略させて戴きました。

## 引用・参考文献

- (1) 堀薫夫「現代社会における発達観」、「生涯発達と生涯学習」、ミネルヴァ書房、二〇一〇年、九頁
- (2) 後藤末吉「野外彫刻について」、「茨城大学五浦美術文化研究所報」、茨城大学五浦美術文化研究所、一九七七年、六四頁
- (3) 小田原のどか「空の台座 公共空間の女性裸体像をめぐる」、「彫刻1」、シナノ書籍、二〇一八年、四二六頁
- (4) 竹田直樹、八木健太郎「野外彫刻展型の彫刻設置事業の変遷」『環境芸術2183-483』、環境芸術学会、二〇〇四
- (5) 村上しほり、梅宮弘光「9037 戦後神戸市の都市環境形成における神戸須磨離宮公園現代彫刻展の意味」、「都市環境と文化事業の相關に関する研究1」日本建築学会近畿支部研究報告集、日本建築学会、二〇〇九年
- (6) 竹田直樹、八木健太郎 前掲論文
- (7) 彫刻みがき隊あのね会発行『令和元年度活動報告』、山口県宇部市ふるさとコンパニオンの会会長、脇彌生氏の手紙より抜粋
- (8) 札幌彫刻美術館友の会「札幌彫刻美術館友の会とは」、<https://sapporo-chokoku.jp/mainwp/sample-page-2/>
- (9) 女性が自らの生き方を発見し、社会のあらゆる分野における活動に参加及び参画するための基礎的な能力を身につけることを目的とした女性のための学習施設、神戸市長を学長として、本科三年制、研究科二年制からなる。
- (10) 二〇一九年現在の担当部局は市民参画推進局文化交流課である。
- (11) 神戸ゆかりの美術館は神戸市が運営する公立美術館である。二〇〇七年に開館して以来、神戸に関係の深い美術作家の絵画・彫刻作品を紹介している。
- (12) 田中梨枝子「郷土作家を顕彰する美術館―教育普及事業報告―」、「『KOBÉ ARTISTS MUSEUM Collection』、神戸ゆかりの美術館、二〇一四年、二四頁
- (13) 新谷英夫、新谷琇紀、新谷澤子、新谷英子『彫刻・四人集 1938〜1979』、太陽出版、一九八〇年
- (14) 二〇〇六年の荒岡グループ結成時より、荒岡美知子氏が代表を務める。